

## 歩はばを合わせて

静岡県 長泉小学校

5年 宮口 かほ

お母さんが病気になった。ずっとずっと、お腹が痛くて。ずっとずっと、その痛みにたえていた。お父さんは仕事を休み、お母さんと病院へ行った。その病院で検査をして、お母さんはとても恐ろしい病気だとわかった。

お母さんは平気そうにしていたけれど、一度だけ泣いた。友達やおじさんに病気のことを話したときだ。私は泣いているお母さんのそばに行き、頭をなでた。

「ありがとう。」

と、お母さんは笑って言った。

この頃の私は、すっかりお母さん子ではなくて、いっしょに歩くのも、手をつなぐのも、ギュッと抱きしめられるのも拒否していた。家族3人で出かけるときも、私は一人でスタスタ歩いていってしまう。次にお父さんがスタスタ歩き、お母さんは後ろでモタモタ歩いていた。

「ちょっと！二人！歩くの速すぎ！」

と、お母さんがさげんでいても、私とお父さんはスタスタ行ってしまう。そんな日々が続いていた。でも、仕方ないと思った。だって私はもう5年生で、親ばなれをしようとしていたのだから。

お母さんが入院して、手術をすることになった。その間は、お父さんと二人暮らしだ。お父さんは、お母さんにいろいろ教わっていた。お母さんは、

「とにかく、かほの生活をいつも通りにしてやりたいから。」

と言っていた。

お母さんは、いつも自分のことより、私を優先にしている。自分が恐ろしい病気になっても、

「何があっても明るくほがらかに！」

と言って、ふだんと変わらずに生活していた。

お母さんのいない9日間、お父さんは大変そうだったけれど、私はいつも通りに変わらず過ごせた。運動会があったけれど、お父さんがお弁当を作ってくれたし、お父さんが応えんに来てくれて、お母さんにみせるビデオを撮ってくれた。私はすごく幸せな子どもだな、と感じた。それは、お父さんとお母さんに愛されていると感じたからだ。

私が帰ったら、お母さんが退院して家に帰ってきていた。9日ぶりに会えて、泣いてしまった。お母さんは、少しやせていたけれど、元気そうだった。

「ただいま！」「おかえり！」

私はお母さんに抱きついて、お母さんはギュッと抱きしめてくれた。

今、私は3人で出かけるとき、お母さんの横でゆっくり歩く。お母さんの歩はばに合わせて。私たちは家族だ。これからもずっと、何があっても。

親切って、実は、自分のいちばん近くにいる大切な人に「してあげる」のではなく、「する」ものだと思う。そして、そこから周りへ広がっていくものだと思う。

それに気づいた私は、人としてまた一歩成長できたと思う。